安部公房『砂の女』論

――登場人物と「砂」、およびテクストとの関係をめぐって――

波潟　剛

はじめに

小説『砂の女』（一九六二年）は、安部公房作品の中でも、とりわけ多くの批評家や研究者に注目されてきたと言える。この作品については、すでに広瀬晋也氏などが指摘している通り、二つの方向から論が展開されている。[1]その方向の一つは、粒子の生理的な描写に始まって、作品全体を覆うほどの迫力を見せる「砂」の感覚と、その「砂」の世界にあって、状況に埋没しがちな日常生活を変革しようとする主人公への肯定的な評価である。この方向での評価を決定したのは佐々木基一氏の見解とするのが通説となっている。氏は砂丘の集落に幽閉された教師が、そこからの脱出を試みるという筋立てに、過酷な状況を変革する人物をとらえる。その考察を通して、極限状況を克服する彼の姿に感動したとも述べている。とりわけ、この読後感想とも言うべき指摘は、肯定的な評価の凝縮をともなっていて印象深い。[2]

しかし、このような佐々木氏の見解をあらためてたどるときに感じられるのは、作品の構成に対する恣意的な限定が存在することである。すなわち、この作品は、「八月のある日、男が一人、行方不明になった」（三頁）という報告から始まる冒頭の一文から分かるように、主人公の不在という結末が、作品の始めに提示されている。つまり、二節以後になると（1から31までの作品内の区切りを節と呼ぶことにする）、作品は行方不明者当人が、作中時間の現在の状況を描写するかたちで進んでゆく。そして、三一節の最後までが、現在進行形としての「男」の記録となっていて、結末が冒頭の一節に照応しそうなかたちで終わるのだが、ただその巻末には二通の公文書が付載されている。しかし佐々木氏は、作品内容の二節から三一節に登場する人物像を評価するだけで、一節、あるいは三一節の後に付された二枚の公文書についてはほとんど言及していない。したがって、「男」の行動の記録を通して、状況に立ち向かう姿を導き出す、その論の展開についていえば、二節から三一節までの内容に関する説明としては、確かに適切である。こうした分析には、「砂の世界」を現代の状況としてとらえ、疎外が日常化した現代にあえて肯定的な生き方をしようとする人物という認識が前提とされている。このような、「砂」を現代の隠喩として読みとろう

とする見解は、映画『砂の女』の批評においてもみられる一般的な傾向である。[3]

この佐々木氏の論に代表される、肯定的な評価に対する疑問、あるいは批判から出発するのが、もう一つの論の方向である。その代表と見なされるのが三木卓氏、田中裕之氏、福本良之氏らの見解である。[4]諸氏の主張を貫くものは、主人公の日常性の確認を自己の克服と呼べるのか、という疑問である。その根拠には、「砂」が現代社会の隠喩だと読みとる場合、水の溜まった木の桶（「溜水装置」）の発見という筋立てを通して、現実を変革するという構図を読みとるのは困難であるという主張がある。さらにはまた、縄梯子を手に入れ、幽閉状態を解かれても、「男」がそこから立ち去らなかったということは、結果的に現実逃避の繰り返しと読み取れるのではないかとも主張する。その結果、結末において、その後の「男」の将来を予測するのは困難であり、曖昧な表現のまま完結していることには肯定的な評価を導き出せない、という見解である。

以上、二つの方向性の評価を軸とするこれまでの諸論文において、それぞれに注目すべき指摘が存在することはいうまでもない。しかし気にかかるのは、佐々木氏の論に対する批判で指摘しておいたように、作品に対する評価の焦点が、主人公である「男」の認識や行動に限定されていることである。つまり、『砂の女』という小説の題が示す通り、主要な登場人物はほかにも存在する。それらを捨象して作品全体の評価をすることは可能だろうか。稿者としては、「砂」と登場人物との関係を構造的にとらえることのほうが重要ではないかと考える。なぜなら、砂穴での暮らしが日常生活とのかかわりをもつならば、その「砂」の世界がもつ日常性の構造は、「男」ばかりでなく、「女」や村人、あるいは「男」の同僚たちの分析をも通して考察されるべきだと考えるからだ。それに、この小説の構造にとってより重要なことだが、結末の後に付される二枚の公文書が作品世界と無関係であるという、多くの先行研究の判断には、主人公の行動に焦点を絞りすぎている点で、問題があるのではないだろうか。

そこで本稿はまず、登場人物を「男」、「女」、村人とに分けて、それぞれの「砂」との関わりを探ることを試みてみたい。そのうえに立って、小説の構造に及ぶためにも、結末に付される二枚の公文書をテクストと人物との関係に、さらには「失踪」という概念と結び付けて考察を加えてゆきたい。

第一節　「男」と「砂」

『砂の女』は、簡単に筋立てを要約すれば、海岸沿いの砂丘へ昆虫採集にでかけた教師が、思いがけず砂穴の底にある一軒家に閉じ込められ、必死に脱出を試みるということなる。ここに登場する教師は、名を「仁木順平」と言う。そもそもこの「男」が砂丘行きを決めたのは、昆虫のニワハンミョウ属において新種を発見するためであった。この趣味は、新種の発見によって、自分の名前が図鑑に記録され、永久に残ることを期待していた。ニワハンミョウの生息地である砂丘にたどり着いたとき、この「男」にとっての「砂」は、つねに流動を続ける物質だった。それは、百科事典にある砂の定義から導き出される。すなわち、

「砂――岩石の破片の集合体。時として滋鉄鉱、錫石、まれに砂金等をふくむ。直径2～1／16 m.m.（中略）なお、岩石の破砕物中、流体によってもっとも移動させられやすい大きさの粒子」（一一―三頁）と言う指摘が、そのまま「砂」に対する「男」の認識であった。

砂丘に着いた当初、「男」は自分の置かれた環境としての砂丘ではなく、むしろ砂という物質の流動性にこだわっている。例えば、「男」は砂穴にわざわざ底を掘って生活する家を見て、「いずれ、砂の法則に、さからえるはずもないのに……」（一六頁）と考えたりしているところにその認識がうかがえる。この「流動する砂のイメージ」（一三頁）は「男」にとって絶対的であった。なぜなら、それがこの「男」にとって「年中しがみついていることばかりを強要しつづける、この現実のうっとうしさ」（一三頁）を忘れさせる唯一の慰みとなっていたからだ。つまり「男」にとっては、これまでも、そしていまも定着にこだわる退屈な毎日が、定着を絶えず浸食してやまぬ、流動する砂の夢想によって救われていたのである。

しかし、この「男」の定着を嫌悪する思いこみには、鶴田欣也氏が以下で指摘するように、それと相反する欲望が内在していることを見逃してはならないだろう。

砂と昆虫によって代表された相剋する二つの欲望――絶えず流動していたいという考えと、昆虫の背中をピンで刺すように時間の息の根を止めて自己を永遠に保存したいという考え――があるようである。砂はその流動性のため、区画化された社会人にとっては不毛と破壊の象徴であり、昆虫は半永久的な自己保存の象徴となる。砂の穴の中に捕らえられる前に『砂の女』の主人公は破壊と自己保存という相反する欲望を砂と昆虫に託していたということになる。[5]

この氏の指摘の通り、「男」は新種の昆虫を発見し、自分の名前を図鑑に記載（定着）することを希求する一方で、「定着に固執しようとするからこそ、あのいとわしい競争もはじまるのではなかろうか」（一三頁）と、定着にこだわる現実を嫌悪している。つまり「男」のうちには、定着に対する相反する欲望が共存している。この相反する欲望は、武石保志氏の言葉を借りれば「彼の考えは矛盾している」ということになるだろう。[6] しかし、「男」はこうした自己矛盾に気づいていない。あるいは気づこうとしない。なぜなら、自己の矛盾を認めてしまうと、彼は自分自身が現実の生活に適応していない事実を確認しなければならなかったからだ。

「男」の職業は教師である。すなわち、彼の仕事は次々と生徒を送り出すことによって成り立っている。しかし「男」は、「深く埋もれた石のように、いつも取り残されていなければならないのだ」（七一頁）と「妬みの虫にとりつかれ」ている（七一頁）。また、そのすぐ後には、同僚たちを「彼等は、自分をぼろ屑のようだと感じ、孤独な自虐趣味におちいるか、さもなければ、他人の無軌道を告発しつづける、疑い深い有徳の士になりはてる」（七一頁）と評している。ここには、流動して止まない生徒たちへの羨望もさることながら、「男」が同僚たちとも順

応していないことが推測できる。それは、彼も定着によって成立するはずの教師生活を送りながら、自分自身をその範疇に加えようとしないことからも明らかであろう。「男」は、教師生活において順応できないことの代償を「昆虫」に求める。しかし、そうした「孤独な自虐趣味」に抵抗を感じてもいた。それゆえ「男」は、これまでのジレンマを、「昆虫」の住む「砂」の世界へ、そして「砂」の流動する性質へと夢想を移行することによって、ようやく解消していたのである。そのためにかえって、「砂」の世界にはまり込んだ「男」は、「砂」への夢想が裏切られることになる。こうして、軟禁生活が長引くうちに、これまでの都会での日常生活にも疑問を抱くようになってゆくのだが、この「男」の認識の変化は砂穴での「溜水装置」の発見によって決定的になる。

数度の脱出劇とその挫折の後、作品は二八節（第三章）に入る。季節は十月になり、休暇を取った八月から数えると、約二カ月が経過している。ある日、「男」は「裏の空地に、鴉をとらえるための罠をしかけてみた。それを《希望》と名づけることにした」（一九〇頁）。この罠はほとんど役に立たずに見捨てられていたのだが、数週間後、「男」は仕掛けとなった桶の底に水が溜まっているのを発見する。この溜水発見の場面は、本稿のはじめで紹介したように、先行の諸論考でも議論となっていたところである。諸論考も指摘するように、作品世界において、この水の発見は、飲料水を絶たれる危険からの解放でもあり、「砂」に対する一面的な認識の根本的な修正でもあった。しかし、水の溜まった木の桶（「溜水装置」）がどれだけ機能するかは疑問である。田中氏が指摘するように、「効力は、村人、それも殊に海に面した十数軒の人間をして、砂の脅威から免れるほどのものではない」かもしれないからである。(7)

ただしここで重要なのは、「男」がそれまで「見ていたものは、砂ではなくて、単なる砂の粒子だったのかもしれない」（二一三頁）と判断していることである。では砂はどうなったかといえば、水を吸い上げる「ポンプ」（二一二頁）と認識されている。そして、集落に対する「いざというときのための、大事な武器」（二一二頁）とする研究が始まる。「男」は、溜水の発見によって、砂丘の砂の現実を認識し、朝には霧に覆われ、家屋は湿気によって腐敗する原因を突き止めた。また、こうした認識の変化によって、はじめて「昆虫」と「流動する砂」の夢想から解放されることになる。このときの「男」は、都会生活の本質も実は形骸化してしまっていて、「輪郭があるだけで、中味はない」（二一三頁）と考えるまでになる。そしてその結果、「男」はいつの日かこの「砂」の集落と対決する望みを抱く。

ところが結末の段階にいたって、穴から出入り自由になっても、「男」は逃げ出さない。というのは、「溜水装置のことを誰かに話したいという欲望で、はちきれそうになっていた」（二一六頁）からである。このように、砂の粒子から、砂丘の運動へと移行した関心は、村人への関心へとつながっていく。この変化については、「男」がこの時点にいたって、「砂」の集落の人々と適応する機会を見出だしたととることもできるだろう。しかし、本稿のはじめにも触れたように、この判断はまだ結末を考慮しているとは言えない。また、「砂」と「男」との関係から導

き出される、流動、あるいは定着といったイメージも、単に両極にあるものではないということは本節で検討した通りである。では、こうした事態を把握するためにも、以下では範囲を広げて、「男」以外の人物と「砂」との状況を検討してみようと思う。

第二節　「女」と「砂」

前節でみてきたように、当初の「砂」は流動する粒子として、「男」の観念にとっては現実逃避の道具となっていた。しかしやがて、「男」の関心は粒子から砂丘全体へと移行した。それとともに「男」には、村人たちに対する認識の変化が現れるようになった。この認識の変化をたどるために、本節においては、この作品の題名にもなっている「女」に注目してみようと思う。彼女はこの集落のはずれに住み、「男」が軟禁される家の主人である。ただしこの「女」は、焦点化されている「男」の相手としてしか表現されないということもあって、作品世界の前面に登場する機会が少ない。そのため、「女」が自身の経歴などを明らかにすることもほとんどない。それでも本節の必要から、断片的に捉えられる彼女について紹介するならば、彼女は砂丘以外の場所からこの集落に移ってきて(八〇頁)、夫と子供を砂丘での生活のなかで失っている(二六〜七頁)ということが分かる。

「女」と「砂」の関係を考えるときに、まず覚える興味は、砂の腐敗作用に関する彼女の発言である。この「腐敗」という問題は、彼女の家に来た当初の「男」にとって意外なものだった。というのも、乾燥した土地が砂地であるという一般的な理解が通用しないからである。このことは、次の場面を見れば分かる。

「そりゃ、天井に砂が積もっちゃ、具合わるいだろうな……だからと言って、砂で梁が腐るってのはおかしいじゃないか。」
「いいえ、くさります。」
「しかし、砂ってやつは、もともと、乾燥しているものなんだよ。」
「でも、腐りますね……砂がついたまま、ほったらかしにしておいたら、買いたての下駄だって、半月もたたないで、融けてしまったって言いますからねえ。」
(二四——五頁)

乾燥した砂という「男」の知識は、この「女」の言及によって完全に否定されてしまう。この「女」からはさらに、砂自体が腐るということをも耳にする。つまり「女」にとっては、砂による侵食には、村人の場合と同様、家屋を埋没させるという意味と、家屋の柱や屋根を腐食させるという二つの意味があったのである。このとき「男」は、「自分のなかにあった砂のイメージが、無知によって冒瀆されたような気」(二五頁)になった。すなわち、砂丘に到着したばかりの「男」にとっての辞書的な認識は、集落での生活を続け砂の現実を理解していた「女」の認識とはかみ合うことがなかった。

「女」の現実は、「砂」の保湿性によって木材が腐ってしまう

ような家に暮らしていることであった。しかし彼女が、生まれ故郷でもない、こんな過酷と思われる家で生活しているのは、村人との奇妙な人間関係が成立していたからだった。この点に関しては、すでに論考をなしている広瀬晋也氏の指摘をまず紹介する必要があろう。

氏はまず「呼びかけ」の起こる場面に注目する。初めて「男」が「女」と出会う場面で、村人が「女」を「婆さん」と呼ぶ。だが、「男」が推測するところでは、「女」は三十前後にしか見えない。それにもかかわらず、「女」は「婆さん」と呼ばれることに何の違和感も表さない。「女」の名前と実際の年齢は作品世界からは知られないが、前述したように、彼女はもともと外部者であり、現在では夫を亡くした未亡人である。しかし、未亡人というだけの理由で、「女」が「婆さん」と呼ばれるのにはどうしても不自然さが残る。こうした人間関係が成立する理由について、広瀬氏は次のように述べる。

> 彼女にとって村は外部の世界ではない。砂の穴とそれを囲繞する寒村とが唯一の、すべての世界である。これを包囲する都市こそ、無関係な外部の世界である。（中略）彼女は村人と対等の〈契約〉をしている。村は彼女の砂の底の自由を保障し、食料や生活必需品を提供する。彼女は砂掻きという労働を提供する。単純で過酷で純粋な肉体労働である。しかもその労働によって彼女自身の生存の意味も、穴の底も村も支えられている。彼女の存在＝〈砂掻き〉はその世界に屹立する。[8]

氏も指摘するように、村人と「女」とは、砂掻きという労働によってしか結ばれていない。言い換えれば、労働作業という義務を取り払ったとき、彼女と村人との関係は絶たれてしまう。このことは、「女」の家がその集落の中心からはずれた「一番外側にある、砂丘の稜線に接した穴のなか」（二〇頁）にあったことからもうかがえる。「女」は夫と子供を失って、共同体の人間関係や集落の産業体系から疎外されている。だからといって、彼女はそれを気にも留めていない。というのは、穴底での自由を与えられているので、あえてそれ以上、彼らとの関係を深める必要がないからだ。もともとの集落の人間にとっては、彼女は集落の維持、拡大に寄与する労働力でも、人員を産み出す性的存在でもない。したがって「婆さん」という呼称は集落に占める「女」の位置をも示す指標だとも言える。それに甘んじてか、「女」も周囲の人間から固有名で呼んでもらうことを期待していない。彼女は「さんざん、歩かされ（略）歩きくたびれ」（八〇頁）たころ、この集落にたどり着いたのである。それゆえに彼女が望むのは、ただ自分の今の生活（定着）を守ることだけであって、穴底での生活の自由が許されるならば、集落の周縁に置かれようと、自分を何と呼ばれようと無関心だった。こうして「婆さん」という呼びかけが双方に了解されているのである。

こうした状況下において、「女」に不足している労働力が、迷い込んできた「男」によって補充されたのである。そのために、砂の崖に覆われた「男」の監禁生活はその後半年間続く。ところが、半年も監禁された後のある日、「女」は子宮外妊娠と診断

されて町の病院に運ばれることになる。その際、村人は穴底の家と地表とを結ぶ梯子を放置する。「男」はその梯子を使って外に出る機会を与えられたわけである。これは、「男」にとっては重要な問題だが、村人にとってはそれほどのことではなかった。なぜなら、彼らにとって「男」が必要なのは、「女」の労働力を補うためでしかなかったからだ。だとすれば「女」がこの集落からいなくなれば、「男」も集落にいる理由はない。「男」は、「女」のように集落への定着を希望してはいない以上、村人は「男」を引き止める理由はないのである。

ここで再び、病院に運ばれる「女」に注目すると、その姿は彼女を見送る「男」と対照的である。ロープで吊るされた「女」は、「視線がとどかなくなるまで、涙と目脂でほとんど見えなくなった目を、訴えるように男にそそいでいた」(二一五頁)。しかし、迎えの車が来て、縄梯子が降ろされると、「女によりそい」、「腰のあたりをさすりつづけてやった」男は、彼女を「見ないふりをして、目をそむけ」ている(二一五頁)。この何気ない「男」の仕草には注意する必要がある。半年にわたって共同生活を続けてきたはずの「男」の関心は、彼女の容態よりも、穴の外に出るための縄梯子や、自分で作った溜水装置へと移行してしまっている。この場面は、作品世界において、「女」が関係の絆を深めようとする当の「男」とは、結局のところ、脆い結びつきでしかなかったことが示されている。

「女」は、砂掻きという「労働」によって集落との人間関係を保ち、砂の壁に覆われた穴底における生活の自由を得ていた。しかし、それは集落に隷属した状態での自由と定着であった。だとすれば、集落にとどまろう(定着しよう)とする部外者である「女」の立場は、定着というにはあまりに不安定な状況ということになろう。このようにして「女」と「砂」との関係は、「男」の場合とは異なり、「女」が「砂」に集落への定着の夢を託して失敗するという結末を迎えている。では、村人と「砂」との関係はいかなるものか。次節で検討してみよう。

第三節　砂丘の集落における「砂」の意義

小説の舞台となっているのは、主人公の「男」が幽閉された砂丘の集落であることは既に述べた。したがって、この集落が作品の結末まで出来事の中心地となるのは言うまでもない。この村は、海岸近くの砂丘に埋もれるようにして存在していた。ある日、ここへ昆虫採集をしに、「男」(仁木順平)がやってくる。「男」が集落に到着した当時の場面をまず引用する。

> 男がその道を通っていくと、漁業組合の前の空地で遊んでいた子供たちも、傾いた縁側に腰をおろして網をつくろっていた老人も、一軒だけの雑貨屋の店先にたむろしていた髪の薄くなった女たちも、一瞬その手や口を休め、いぶかるような視線をなげかけてきた。(七頁)

この時点では、子供や老人や女たちが、かなりこの「男」を警戒していることが分かる。「男」はこうした反応が単によそ者に対する警戒心であると考えて、気にする様子も見せない。また一人の老人が、「調査ですかい?」(一六頁)、「すると、あん

た、本当に県庁の人じゃないんですね？」（一七頁）と執拗に尋ねる理由もあまり深くは考えない。集落に対するこうした無関心さが、その後、穴の底の一軒家に軟禁されるという不幸を招く。

集落に入り込んだ「男」は、そのときほとんど興味を示さなかったのだが、この小説の始発の場面において、すでに集落の二つの特徴が示されている。それは第一に、「男」がその集落に到着したとき、まず姿を見せたのが子供や老人や女たちであって、働き盛りの男ではなかったこと。そして第二には、その集落は、部外者に対して執拗に警戒する必要があったということである。これら二つの特徴が集落と「砂」との関係を規定している。

まず、第一の問題について考えると、実は、男たちの仕事である砂掻きが夜行われていることからすれば、昼間は家の外にいなかったということも言えるだろう。だが、そのような単純な説明よりもむしろ、この集落の構造と過疎化の状況を考えなければならないだろう。昆虫採集に来た「男」は、その日のうちに、結局閉じ込められてしまうのだが、人手不足の集落にとって、それは初めての出来事ではなかった。この点はあとで「男」と「女」の次のような会話から理解できる。

「ちょっと、念のために、聞いておきたいんだが、いままでに、こんな目にあったのは、ぼくが始めてなんだろうか？……」

「いえ、なにしろ、人手が不足しておりますでしょう？……財産もちも、貧乏人も、働きがいのあるものは、つぎつぎ部落から出て行ってしまいます……とにかく、砂ばかりの、貧乏村ですからねえ……」（一〇六～七頁）

この「女」の情報からすれば、彼のほかにも、「絵葉書屋」や「学生」が、集落から出ていった働き手の代わりに軟禁されたという。そして彼らは、砂の壁が脱出不可能なほどに周囲を高く覆っている家に幽閉された。なぜなら、それらの家々は集落の中でも砂の侵食をはじめに受ける海側にあり、しかも「人手に困っていた」（一〇七頁）からだ。集落の中でも、海から遠い家は、ふつうに砂地の上に建っていた。だが、海側の家々となると、屋根の高さ以上に砂が覆い、砂丘の移動によって絶えず家屋全部が埋没する脅威にさらされていた。しかし、集落の中にはそれを補えるだけの人手はもういない。だからといって、砂丘の進行は決して休まない。そのため集落の人々は、その砂の壁を利用して、都会からやってくる男たちを軟禁し、集落の環境を維持していたわけである。

次に、第二の点について考えてみると、これは前述した監禁の事実が外部に露見することへのおそれだけではないように思う。話もだいぶ進んだ二九節のある場面を見てみると、次のような会話が記述されている。

「ここにいたって、いずれ、暮しらしい暮らしはしちゃいないんだろう？」

「でも、砂がありますから……」

「砂だって？」（中略）「砂なんかが、なんの役に立つ？つらい目をみる以外は、一銭の足しにだってなりゃしないじゃないか！」
「いいえ、売っているんですよ。」
「売る？……そんなものを、誰に売るんだ？」
「やはり、工事現場なんかでしょうねえ……コンクリートに混ぜたりするのに……」
（二〇〇頁）

このように、村人が毎晩掻きだしている砂は、工事現場で材料とされていることが分かる。その行き先は住宅やビルの建設が進む都市にほかならない。村を出ずに残った人々が毎日砂掻きを繰り返しているのは、砂の販売がその集落の主要な産業活動となっているからだった。しかし、その砂は塩分を多量に含んでいて工事には適さないばかりでなく、建築基準に違反する砂であろう。それを承知で、村人たちは安く売りさばいている。彼らが部外者や当局の調査を恐れるとすれば、こうした違法行為が発覚し、村唯一の産業が奪われることではなかったか。

砂丘の集落と「砂」との関係を見るとき、そこには家屋を埋没させる侵食作用といった面以外にも、「砂」の侵食を防ぐ労働力を確保するための軟禁の場、あるいは産業資源としての側面が確認できる。ただし、それらの側面は、いずれもこの集落における過疎の進行が不可避的であり、過疎を食い止める根本的な解決策の見通しが立たない状況にあることを示している。集落にとどまる者は、都会へ出てましな生活を再開するほどの財産所有者でもなく、またすべてを投げ出して上京することができるような若者でもない。それゆえに、砂の壁で外部の人間を閉じ込め、不法な砂を売りさばかざるを得ない状況にある。このように見てくると、彼らの日常を規制する「砂」には、相反する側面があることが分かる。すなわち、一方では《愛郷精神》（二〇頁）を掲げて団結しようという集落の産業資源として利用されている。しかしそのことが一方では、都市を拡大させる原料として機能し、集落の若者たちを吸収することで、集落の過疎化を一層深刻にさせているのである。こうした状況にありながら、「男」は逃げ出そうとしなかった。それは、「男」がようやく自己の境遇を変えてゆく可能性を「溜水装置」に見出だしたからだ。しかし、先ほども指摘したように、「水」の可能性には限界があり、「水」の夢想は「砂」の夢想のすりかえにすぎないかもしれないし、また村人との関係もすでに終ったように見える。この点は、「男」もその後実際に村人と接触すれば気づくことのように思える。ならば、作品の結末をどう考えるべきか。次に登場人物とテクストとの関係を検討し、そのうえで考察してみたい。

第四節　休暇から失踪へ

本稿のはじめで述べたように、「男」の「失踪」は、作品の冒頭において提示されている。そして、この作品の結末には、この提示を確認するように、「失踪に関する届出の催告」と「審判」の二通の公文書が転記されている。この判定が裁判所によって下されていることからも分かるように、「失踪者」の認定は二節

から三一節に活動する「失踪者」当人の「男」の記述と一線を画している。

この小説の構成が安部公房の手によるとすればそれまでのことだが、一節に登場する失踪の報告、二節から三一節までの行動時点の描写、そして末尾の公文書、この三種の文章を結び着けるものは何なのか。稿者はこの点を分析しなければ、前節までの問題は解決しないと考える。また、結末に対する解釈は、『砂の女』研究に関する二つの方向性を決定する部分とも関係するので、ここで検討してみようと思う。この問題について、中山眞彦氏は、「冒頭の物語調部分などは、かって失踪以前の「男」の身近にいて、失踪後もなみなみならぬ関心を寄せ続けていたらしい人間が報告者であろうと想像させる」[8]と述べている。また広瀬氏は、「『砂の女』一編は、事件の当事者たるこの男が、自分の体験を回想し、記録した報告書とも言うべき骨法を備えた作品である」[10]と指摘する。広瀬氏は作品中の以下の記述を根拠としている。

一体なにをそんなにびくついているのだ?……敵の急所をおさえているのは、おまえじゃないか……なぜもっと、落着いた、観察者の気持ちになれないのだ!そうとも、無事に帰りつけたら、この体験は、ぜひとも記録しておく価値がある。

ほう!これは驚きました、先生がついに、ものを書く決心をされたとはねえ。やっぱり体験なんだな。皮膚に刺戟をあたえないでおくと、ミミズだって、一人前には育たないって言いますからね……ありがとう、実はもう、題まで考えてあるんですが……ほう、どんな題です?……《砂丘の悪魔》か、さもなければ、《蟻地獄の恐怖》……こりゃまた、ひどく、猟奇趣味だな。ちょっと、不真面目な印象をあたえすぎるんじゃないですか?……そうでしょうか?……

(一〇一～一〇二頁)

この引用は、幽閉生活のはじめの頃にある問答である。ここで、「この体験は、ぜひとも記録しておく価値がある」と切り出したのは「男」、仁木順平である。しかし、その相手、「ほう!これは驚きました、先生がついに、ものを書く決心をされたとはねえ」と話しかけた者について、作品からは特定できないのだが、ここから広瀬氏は、「男」と記述者との関係を導き出している。

右に引用した問答は、「男」が現在の行動や心理を描写していく構成からみると、奇異に感じられる。というのも、この問答の相手は出来事の展開と関係がないからである。つまり、この声の主は、登場人物として直接「男」の目の前に現れたわけでもないし、「男」の心理描写を円滑に進めることもしない。それは単なる聞き役に過ぎない。ではなぜ一人称的な記録調の文章に、このような場面が存在するのであろうか。これと似たような場面を探すと、二八節でも「男」と正体不明の声との問答がおこなわれていることに注意したい。

男は、その渦にむかって、思わず訴えかけている。

(裁判長閣下、求刑の内容をお教え下さい!判決の理由

をお聞かせ下さい！被告はこのとおり、起立して待っているのです！）（中略）

（百人に一人なんだってね、結局……）（中略）

（対策のことなんか言っているんじゃない、おれの苦しみのことだよ……沙漠の中だろうと、沼地の中だろうと、不法監禁が、不法だってことに、なんら変りはないはずじゃないか！）

（ああ、不法監禁……しかし、人間、欲を言ってちゃ、きりがないからなあ……せっかくこうして、部落の連中からも、重宝がられているのだし……）

（糞でもくらえだ！おれにだって、もっとましな存在理由があるはずだ！）

（一九五―七頁）

この二つの場面に共通して言えることは、問答の相手がともに「男」の被害者意識をまったくの妄想として揶揄する点にある。砂丘での生活を《砂丘の悪魔》や《蟻地獄の恐怖》と題し、また、砂丘での監禁をひたすら不法だと言い続ける「男」の被害者意識。「男」のこうした法への訴えかけは、声の主によって一つ一つ疑問視されてゆく。問答の特色はここにある。この特色は、やはり出来事の展開と直接には結びつかない二枚の公文書とも関連している。

先ほども触れたように、結末での「男」は、集落から逃亡する気配がない。それだけでなく、集落の人々との対話を求めている。しかし、そのすぐ後に、彼の「失踪」が報告されている。これは「男」がその集落にとどまったというよりも、むしろ法によって集落を裁こうとしていた「男」自身が、法によって裁かれるという皮肉の現れではないか。言い換えれば、この報告は架空の対話者と同じ視線を投じているのである。

しかも、「失踪宣告」の手続きをしたのは、妻（仁木しの）である。つまり、「男」はそれまでの生活を精神的に見捨てたが、妻は、その六年半後、夫を法的に葬るのである。これは、「もし、もう一度、関係を回復することがあるとしても、それはすべてを御破算にしてからのことである」（二一三頁）という、「男」の心情を実現してしまっている。ただし、関係の回復までも否定はしない「男」にとって、これは予測を超えた出来事であろう。自己の属する社会集団や、幽閉される村落共同体を嫌悪しながら、拒否しきれない「男」。彼の甘さが、後に国家という巨大な共同体によって裁かれるのである。

この点を踏まえてテクストについて考えてみると、『砂の女』は、報告者が冒頭の一文を「八月のある日、男が一人、行方不明になった」（三頁）と記すところから始まっている。つまり報告者は、書き始める以前に「男」の運命を知っている。この場合、報告者が本人自身だということも十分考えられるだろう。だとすれば「男」は、結局、集落にとどまることもできなかったと考えられる。そして、最終的には国家という共同体からも死者として葬られたことを知っている。[11] しかし、この地点に立たされたとき、「男」自身に大きな変化はない。言い換えると、最後に妻のとった行動は、「男」のそれまでの生き方を浮き彫りにしてしまう。すなわち、妻と別居し、「宛名を書き、切手まで

はっ」（九一頁）で、手紙をとおして一人旅の連絡をしなければならない家庭生活。しかも、その妻を「あいつ」としか呼び得ない夫婦関係。このような状況からすれば、家庭に始まった疎外感は、もとから無意味な発想でしかないのである。そして「男」は、都市化社会そのものの失踪状態を明らかにしようと、自らの境遇を追体験する。その際「男」は、認識面の変化が起きる前の心理も正直に記録しようとはする。だが、かなりの変貌を遂げた時点（書いている時点）においては、過去の認識を自嘲して描かざるを得なくなっている。このことから、問答相手の声というかたちで未来（書いている時点）の自己認識を過去の思考に介入させた。言い換えれば、過去の自分の心理と記述する現在の自分との乖離が架空の対話を作り出した。このように考えれば、法的処理をされるまでの自己矛盾の反復と、そうした姿を揶揄し、「男」の失踪を「純粋な逃亡」（三頁）と名づけてしまう報告者との関係も理解されるのではないか。「男」が自らの追体験を「失踪」の宣告で締めくくるのは、疎外を克服したのでもなく、日常性を回復したのでもなく、ずっと以前から失踪状態にあったことを確認したためである。

結び

『砂の女』には、今まで見てきたように、一人の男の報告を通して、都市化時代の社会の姿が描かれていた。そのとき「砂」は、集落の過疎化や、「女」の隷属状態、あるいは「男」の現実逃避の世界として機能し、共同体の破綻を露呈させた。そして、それぞれの人物の行動における疎外なき社会、あるいは共同体なき社会を顕在化させた。このように、安部公房の小説において、都市の辺境性をも提示させた「失踪」という題材は、さらに都市の内部へと舞台を移動して再生されてゆくのである。

註

本稿はテクストとして安部公房『砂の女』（新潮社、一九六二年）を使用した。

(1)広瀬晋也「メビウスの輪としての失踪――『砂の女』私論――」（『近代文学論集』一九八七年一一月）

(2)佐々木基一「脱出と超克」（『新日本文学』一九六二年九月）『日本文学研究資料叢書安部公房・大江健三郎』（有精堂、一九七四年）所収

(3)戸井田道三「象徴的に示された〝現代〟」（『キネマ旬報』一九六四年三月上旬号）小倉真美「日本映画批評　砂の女」（『キネマ旬報』一九六四年三月下旬号）

(4)三木卓「非現実小説の陥穽」（『新日本文学』一九六三年一一月）『日本文学研究資料叢書安部公房・大江健三郎』（有精堂、一九七四年）所収
田中裕之「『砂の女』論――その意味と位置――」（『日本文学』一九八六年一二月）、福本良之「『砂の女』試論――「溜水装置」をめぐる一考察――」（『天窓』一九八一年九月）

(5)鶴田欣也「『砂の女』における流動と定着のテーマ」（『芥川・川端・三島・安部――現代日本文学作品論』桜楓社、一九七三年）二三〇頁

(6)武石保志「安部公房『砂の女』試論」（『日本文学論叢』一九八一年三月）一九頁

(7)田中、前掲論文、三三頁

(8)広瀬、前掲論文、五五頁

(9)中山眞彦「解体する風景にひとつの地平が現れる――安部公房の長編小説とフランス語訳について（上）――」（『東京女子大学紀要』一九九三年九月）二〇～一頁

(10)広瀬、前掲論文、四七頁
(11)民法三〇条～三二条(『六法全書』平成八年度版2、有斐閣、一九九六年)
二〇七八～九頁

(なみがたつよし　筑波大学大学院博士課程
文芸・言語研究科文学専攻)